

2017年10月29日<聖霊降臨後第21主日 礼拝>飯川雅孝 牧師

招詞:コリント二4章5-6節

聖書:マタイ4章12-17節

説教 『イエスが訪れたところ』

教会報「『野の花』」が出ました。第一面に「ハンセン病患者への思いやり」について書きました。数年前、ある大学の入学時にクラブが新入生に配っている「ハンセン病はうつらない」というチラシがあり、説明会に出て下さいという案内がありました。現在の若い人にもこのような意識をもった人がいることを知り、感謝の思いを抱きました。特効薬が開発されて治るようになった現在でも、差別を恐れて国立療養所にはご高齢の患者さんが3000人ほど余生を送っていると聞きます。

二三十年前のことになります。ラジオを聞いていましたら、その最も古い施設の瀬戸内海の長島愛生園のことについて話していました。そこに勤めているフランス人の医師が患者を前に我が子に語りかけるようにとても優しく話しかけている。それに感動した若い看護婦が、遠いフランスから来て日本人のために献身する姿を見て、「この医師のために日本人を代表して感謝しよう。自分の生涯を捧げよう。」と決心した。という実話を聞きました。今から21前にはまだ「らい予防法」という法律があり、入所者はそこから出てはいけないと言われました。「家族にも差別の目が向くから」と、家族や故郷、本名まで失って生きてきた状況に加え、今でも、差別や偏見のために社会復帰は出来ないのです。わたし自身は小学校の頃、そういう病気があると聞いて、心の底にトラウマのようになっていましたが、25年ほど前、御殿場にある療養所を訪問し、なんら普通の社会と変わらないと思い、認識が改まりました。でも、今述べたフランス人医師と看護婦さんのことを聞いて、聖書にある「人間の苦悩の中に降りて来られた」主イエス・キリストの姿を彷彿とさせるものを感じました。

病は人間にとっては重いものです。病と人間の関わりを聖書はどう考えているか。マタイ福音書(9章2節)は「人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた。」と語ります。つまり、病、人間の苦しみ、その根元には神から離れている状態、「罪」にあるとイエスは言われる。だから、神の子イエスはガリラヤ中を回り、病にある人、この世で罪人と呼ばれている人々を皆救われた。救われた人々は喜びに満たされたのです。その後、2000年のキリスト教の歴史の中で救われた多くの人が自分はその証人であると言っています。

今日の聖書の箇所に戻って見ましょう。イエスに先だつはるか1350年以上の昔、イスラエルの民はシナイの山の麓で神のご臨在に触れます。どれだけ厳粛な思いに打たれたことでしょうか。それ以来、「聖なる神の宝の子」としての、少数の敬虔な人たちは日常生活の中でも、極めて厳格な「イスラエルのアイデンティティ」—自分たちは神に選ばれた民であるという思いにこだわりました。ですから、自分たちの生活規範とは異なる周辺民族の不条理

な風習やら淫らな性道徳には強い拒否感を示しました。それは、相手が強大な武力や高い文化を持った国であることはどうでも良い。しかし、自分たちは神から選ばれた民族である。それに反し、相手の民には不潔な「異邦人」として蔑んだ意識を持っていました。その異邦人である、メソポタミヤの大国アッシリヤが攻めて来て、紀元前734年最初にアッシリヤの手に落ちたところがゼブルンとナフタリの地、異邦人と混血が行われた土地ですから、イスラエルの民から見たらこの地はもう、聖なる神の地とは言えない。嫌悪感を伴うほどに、その地域の民は見捨てられてしまったとエルサレムを中心とする南ユダのエリート階級は切って捨てたのです。そして、北イスラエル王国はまもなく722年に滅亡させられます。しかし、その時現れた預言者イザヤは異邦人に荒らされたこの地に、「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」と神の御国の希望を見たのです。その後もここはバビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマといった異邦人にずっと踏みにじられてきました。そうした苦しみの中で、そこに住む人たちは神の民であることにどれほどの特権と喜び、意義を感じていたのでしょうか。ほとんど感じられなかったでしょう。しかし、700年経った今、イザヤの預言は成就し、この地域が主イエスの福音が最初に伝えられる地となった。なぜなら、神の子イエスがここに福音を伝えたのですから。今日の聖書マタイによる福音書は「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」と、それを告げています。旧約の預言者の言葉は神の子イエスが語ることにより、わたしたちを祝福する言葉となって、新たな時代を宣言しています。マタイはこの「ゼブルンの地とナフタリの地」を、神の救いのない所、一番惨めな所、そして突き詰めてみれば、人間では救いようのない心の状態とまで言っています。『野の花』に紹介してあるハンセン病に苦しんだ人たちの所はそういうところだった。そこにキリストが来られた。

人類の病の中で、歴史上ハンセン病ほど恐れられた病はないでしょう。患者の苦悩、家族と親族が世から差別される。いわば、生き地獄に置かれた苦しみを歴史は語って来た。主イエスは心から同情された。「イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と救いを求めた（ルカ5：12）。イエスが手を差し伸べ「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。

ベルギー人の**ダミアン神父**は1873年、ハワイ州のモロカイ島に隔離されていた、当時、誰も顧みなかったハンセン病患者たちのところにキリストによって召されます。その収容所は700メートルの絶壁の下にあり、町の人々と一番隔離された所に置かれました。彼は、患者へのケアに生涯を捧げ、自らもハンセン病で命を落とします。彼がハンセン病に罹ったことを知ったベルギーにいる母親は地上ではもう会えないことを知り、「ダミアン、天国で会いましょうね。」と語ったという事です。彼は初めは「あなた方ハンセン病患者は」と語

り掛ける。半ば自分はあなたがたと違うという発言でした。患者たちはそこに差別感を感じました。しかし、彼も医者から自分もハンセン病に罹っていることを宣言させられます。こんどは自分が「我々ハンセン病患者は」と語り掛けます。この呼びかけは患者の救いとなり、まさに心の友となって主に従い命を献げた生涯だった、と言われます。49歳でした。

明治の時代に日本に来た**ハンナ・リデル女史**は熊本の本妙寺の桜を見た後、青い空に美しく咲いている桜の下に多くの患者がいて、通る人々に物乞いをしているのに目を止め、この人たちを救わなければならないとの決意をします。故国英国に帰って私財をすべて売り払い、熊本の地にハンセン病患者のために回春病院を建て、日本におけるハンセン病の患者を救う外国人による先駆となります。

幼くしてハンセン病に罹った**玉木愛子さん**は大阪の実家において、家の中で隠れて住むことが出来なくなった頃、人づてに聞くハンナ・リデルの熊本の回春病院に手紙を書きます。住所もはっきり知らずに入院名だけでその手紙が届いたという事です。神の執り成しを覚えませぬ。夜中の汽車で人知れずに熊本に着いた時、医者が優しく迎え「もう、心配しなくても大丈夫です。」と言われたことに、キリスト教の病院の愛を感じます。ハンナ・リデルへの第一印象を64歳とはいえ、リデルのその若さと美しさに驚いたと言っております。「6尺豊かな身長を見上げた時、ほんとに真善美の化身かと思わずにはおられませんでした。」

\*「碧い（あおい）眼の尼僧美し薔薇（ばら）の花」と歌に歌っています。

幾つかの句は彼女の苦悩に満ちた生への中にも主にある祝福を感じ取れます。

\*発病後（友達と遊べない）： 年豆を 夜空に投げて 泣く娘かな

\*入院（家での蟄居から）： マスクして 病隠すも 今日限り

\*失明の時（すでに熊本から瀬戸に移動後）世を棄てて すでに悔いなし 瀬戸の月

\*世に埋もれても生きる使命： 埋火よ 世に隠れたる 汝とわれ

\*回春病院に母が来訪： 隠れ来し 母と楽しや 蚊帳の中

\*矢内原忠雄の説教を聞いて： バイブルの 奥へ奥へと 去年今年

人類を長年苦しめ続けたこの病も、1873年にはノルウェーのアルマウエル・ハンセン医師が「らい菌」を発見し、1943年にはアメリカのファージェイ博士によって「**プロミン**」薬の有効性が確認され、治らないと言われた病気も今は治るようになりました。感謝です。

ダミアン神父も、ハンナ・リデル女史も自分の心の闇の中に訪れてくれたキリストの愛に触れて神の人となりました。玉木愛子さんは苦しみのどん底からキリストに救われた歌を歌いました。キリストに会う前、「暗闇であり、死の陰」であったわたしたちの心は主イエスに会って救われます。イエスは言われます。「見よ、わたしは戸口に立ってたたいている。だれか私の声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。（黙示録3：20）わたしたちもこの救いに与りたいと思います。